

北大史学会会報

史 筵 16

2018.12.20

彙 報

◎ 二〇一八年度大会（二〇一八年七月二八日）

【研究報告】

木村 聡「連合艦隊から見た第一次ロンドン軍縮問題」

【講演】

田口 正樹（北海道大学法学研究科）

「裁きに服する王 — 13・14世紀ドイツにおける支配者と法の

関係の側面 —」

醍醐 龍馬（小樽商科大学）

「日露関係から見た明治維新史 — マルチ・アーカイヴアルの

手法の現在 —」

◎ 二〇一八年度総会（二〇一八年七月二八日）

総会にて北大史学会の委員・会計監査が以下の通り選出された。

〔委 員〕 橋本雄・井上敬介・吉開将人・砂田徹・高瀬克範・権

錫永・野口飛香留・坂東泰・安酸香織・福井慶丈

〔会計監査〕 松寫明男

次に二〇一七年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認された。

I. 収 入

前年度繰越金

二〇一七年度収入

（内訳）

会費

広告代（北大出版会）

抜刷代立替返却分

会誌販売代金

銀行口座利息

合計

II. 支 出

二〇一七年度支出

（内訳）

『北大史学』五七号・『史筵』一五号出版費用

（印刷代（含・抜刷代）および振込手数料）

郵送費（『北大史学』発送費用）

郵送費（大会・例会案内等）

事務費用（宛名ラベル）

ホームページ製作費用（含・振込手数料）

合計

次年度繰越金

七七二、二〇一円

四一二、一八二円

三七六、〇〇〇円

五、〇〇〇円

七、五六〇円

二三、六二〇円

二円

一、一八四、三八三円

二九六、二七二円

二六八、二七二円

一九、九〇八円

五七〇円

八八〇円

六、六四二円

八八八、一一一円

一、一八四、三八三円

◎ 二〇一七年度卒業論文・修士論文発表会
(二〇一八年三月一日)

【卒業論文発表表】

清水 亮佑「日本古代における即位儀礼の変遷」

長瀬 篤音「ティムール朝末期サマルカンド政権(1469—1500)の君臣・家臣間関係」

田口 直之「属州シリアにおける軍隊と市民の諸関係——ドゥラII エウロポスを例にして——」

江成 慧斗「石錘の機能と用途——北海道南西部における縄文早期から中期にかけて——」

【修士論文発表表】

中村 圭佑「蝦夷地第二次幕領期におけるトカチ場所のアイヌ社会と和風化」

大楠 晋也「北元漢語称号考」

福井 慶丈「植民地朝鮮における「美術」と「工芸」

◎ 二〇一七年度博士論文・修士論文・学士論文題目

(日本史)

●修士論文

野口飛香留「南北朝期の朝廷・貴族社会と陰陽師」

坂本 弘毅「幕末期の佐倉藩蝦夷地調査」

中村 圭佑「蝦夷地第二次幕領期におけるトカチ場所のアイヌ」

木村 聡「海軍軍縮後の連合艦隊」

杉山和香奈「職制にみる幕末期江戸幕府の政策決定」

●学士論文

清水 亮佑「日本古代における即位儀礼の変遷」

千葉 康平「日本古代の衛士について」

石田 達朗「細川高国政権の検討——伊達植宗の陸奥守護職補任の意義づけ——」

田村 奈々「足利義輝期における昵近公家衆についての一考察」

松浦 可歩「中世における孟蘭盆会と施餓鬼会」

五十嵐諒子「貿易都市長崎における遊女と異国人」

石井 七海「徂徠学における社会認識の形成」

久保 南「文化年間における幕府の北方警備」

吉村 早織「幕末維新期における新田岩松氏の由緒とその利用」

浅見 壘「日露戦後の鉄道政策」

太田 徳高「太平洋戦争末期における政府・陸海軍の情勢認識」

坂口 真也「明治中期における札幌近郊農村」

金岡 龍一「戦時期の中国人強制連行——地崎組伊屯武華出張所を例にして——」

野部 一美「ノモンハン事件と日本陸軍」

春名恭太郎「戦後北海道開発体制の成立」

(東洋史)

●修士論文

大楠 晋也「北元漢語称号考」

●学士論文

東 のどか「明代漕運における通惠河の役割」

井出 礎「明清時代の郷紳」

長瀬 篤音「ティムール朝末期サマルカンド政権(1469—1500)の君臣・家臣間関係」

坂東 泰「清末禁煙運動の再検討」

〔西洋史〕

● 修士論文

松村陽佳里「ローマの東方政策におけるミトリダテス戦争の意義」
椿 美咲「1989年秋ライプツィヒに関する集合的記憶の比較—オーラルヒストリーを通して—」

折元 祐介「フランス第二帝政期国家祭典の研究—エクス市における実施例を中心に—」

● 学士論文

佐藤 将伍「19世紀イギリス帝国におけるアイルランド人」
平塚 杏子「サトゥルナリアとアウグストゥスの宗教政策」
田口 直之「属州シリアにおける軍隊と市民の諸関係」

高野 直人「ブリテン島の「ローマ化」」

菅野 真文「二〇世紀フランス領アルジェリアにおける原住民教育とナシヨナリズム」

〔歴史文化論〕

● 修士論文（歴史学分野のみ）

佐藤 加奈「殖民地官僚・持地六三郎の植民政策論」
福井 慶丈「殖民地朝鮮における『美術』と『工芸』」

● 学士論文（歴史学分野のみ）

大場 賢司「文化政治期における朝鮮教育改革」
斉藤 貴喜「戦時下における石橋湛山の言論活動」

〔北方文化論〕

● 修士論文（考古学分野のみ）

小田島 賢「噴火湾北岸域における続縄文前期前半の土器群の研究—豊浦町小幌洞窟遺跡・礼文華遺跡における土器群構成分析法の実践—」

● 学士論文（考古学分野のみ）

山根 瑞貴「緑色岩系石材の流通と磨製石斧—北海道における縄文早期から続縄文期にかけて—」

大澤 柝作「擦文土器製作時の作業環境について—K39遺跡農学部実験実習棟地点の土器圧痕の分析を通して—」

江成 慧斗「石錘の機能と用途—北海道南西部における縄文早期から中期にかけて—」

◎ 研究室便り

〔日本史〕

二〇一八年度は、後期から谷本がサバティカル（研究休暇）に入り、助教含め教員五名・事務補助員一名の体制で研究・教育にあっています。専門研究員は二名、共同研究員は一名です。また、JSPS特別研究員（DC）として高島廉（中世）・上田哲司（近世）の両名が採用され、研究に専念する環境を与えられました。卒業生の動向としては、大谷伸治さんが弘前大学教育学部社会科学教育講座専任講師（日本史）として、永野正宏さんが文化庁文化財部伝統文化課調査官（国立アイヌ民族博物館設立準備室）として、それぞれ新天地を得られました。今後の活躍が大いに期待されます。

学生諸君の構成は、博士課程一二名・修士課程一二名・学士課程六一名、都合八五名と大所帯は相変わらずです。学部二年生による

恒例の研修旅行、今年は橋本先生の引率で、八月末に石川県・富山県を訪れました(参加七名)。巡検先は七尾城、能登国分寺跡、珠洲焼資料館、琴江院、上時国家、白米千枚田、総持寺祖院、福良港、気多大社・寺家遺跡、兼六園、金沢城などで、充実した見学となりました。

ゼミごとの活動は、例年通り、おもに学部学生を対象に院生諸君がひらく、通常の自主ゼミが活発です。いずれも史料講読がメインで、古代史では「令集解」、中世史では「看聞日記」、近世史では「井上貫流左衛門文書」、近代史では「原敬日記」などが取り上げられ、研鑽に励んでいます。

研究室を離れた活動も見られます。古代史では、大学院のゼミで一〇月末に奈良の見学旅行を実施します。近世史ゼミでは、夏合宿で神奈川県箱根・小田原にフィールド巡見の場を設けました。近代史では、川口学部ゼミの夏合宿が登別温泉で、川口・白木沢院ゼミの合同夏合宿が定山渓で実施されました。史料調査合宿が再開されたのも今年の特色です。倶知安風土館では同町史編さん関係史料を合宿調査し目録を作成しました(参加一二名)。また、北広島市エコミュージアムセンターでは阿部仁太郎資料を調査し、目録を作成しました(参加九名)。参加の学生・院生には、よい経験になったことと思います。今年には北海道胆振東部地震がありました。登別合宿はその当日に、倶知安合宿はその直後にあたりましたが、無事日程を終了できた(登別は一日滞在を延ばすことになりました)ことは、印象深く思います。

なお、来年度からは改組に伴い文学研究科日本史学講座は文学院歴史学講座日本史学研究室に名称が変更され、歴史文化論講座から権錫永先生をお迎えすることになります。共同研究室は変更なしの予定です。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

〈東洋史〉

本年九月現在、文学研究科東洋史学講座は、教員二、専門研究員二、共同研究員一、大学院・博士課程一、修士課程三、外国人研究生一の計一〇名で構成されている。文学部学生については、二〇一七年度、研究室の教員を指導教員とする卒業論文が計四本提出された。現在、研究室の教員を指導教員・担任とする学生は四年生一〇、三年生三、二年生七の計二〇名で、研究室全体の構成員は計三〇人のにぎやかさである。

二〇一八年八月(奥付は同年三月)には、北大東洋史談話会から『史朋』五〇号が「三木聰先生退休記念号」として刊行され、OB六名の力作が三木先生に献呈された。すでに繰り返しお知らせしているように、本号の刊行後、『史朋』は休刊することになる。ただしあくまでも「休刊」で、条件さえ整えば復刊予定であって、例会は今後も継続予定である。なお、『史朋』休刊にともない、研究室の情報発信はホームページが主な場となる。すでに二〇一七年度から研究室のホームページ充実化の作業を進めている。OB・OGの皆さんには是非一度見ていただきたい。

この一年間の研究室の出来事は以下の通り。佐藤健太郎氏は、二〇一六年度にチュニジアでイブン・ハルドゥーン賞を受賞したことを踏まえ、二〇一七年度末に北海道大学教育研究総長表彰(研究賞)を受賞した。また、すでに恒例行事となった感のある一〇月の北大駅伝では、佐藤監督の下、研究室から二チームが参加し、その他研究室メンバーも多くが応援に駆けつけた。さらに二月恒例の「追いコン」は、改装オープンした石狩温泉「番屋の湯」にて初開催し、好天に恵まれた上、「いしかり砂丘の風資料館」へのエクス

カーション付きで、きわめて盛会であった。あわせて、九月の大地震では研究室に人的、物的被害がなかったことも、ここに報告しておく。心配して連絡を下さったOB・OGの皆さんに感謝する。

このほか、研究室関係者の動向として、OBの長峰博之氏が二〇一八年四月に小山工業高等専門学校講師に採用されたことを紹介しておく。おめでとう。

教員は各自の研究を「乗り乗り」で進めている。佐藤氏はモロッコの皮紙契約文書の研究やイブン・ハルドゥーン自伝研究といった数年来の共同研究を継続中で、後者に関連して科研費（基盤研究B）「13—15世紀におけるアラビア語文化圏再編の文献学的研究」が新たに採択された。吉開は華南史の研究を継続中で、科研費（基盤研究B）二一九四九年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」が新たに採択され、法学研究科岩谷將氏や名誉教授三木氏らを巻き込んで、専門分野を跨ぐ共同研究が始動した。東洋史学研究室は、教員二人しかいない、傍から見れば実に寂しい研究室だが、今回そろって代表者として大型科研に採択されたことからすれば、「少数精鋭」の集団と自ら言うことも許されよう。

なお、来年度、文学研究科は文学研究院・学院に改組予定である。これにともなう専攻・講座の再編で、東洋史学講座は、新たに歴史学講座東洋史学研究室となる。そして、これまでは別講座であった太田敬子先生が東洋史学研究室に加わり、教員三人体制が久しぶりに復活する。新体制への移行を無事完了し、教員三人で協力し合いながら、研究室のさらなる発展の道を探っていく所存である。

（執筆担当・吉開）

〈西洋史〉

本年も西洋史学講座は比較的平穏な一年となりました。所属は教員が変わらず砂田・山本・長谷川・松島の四名、専門研究員が三名、大学院は博士課程在籍者が四名、修士課程在籍者が十名、学生の学生は全体で四十六名となりました。学部生は新二年生が十三名加わりました。当講座は大学院と学部で順調に進学者を集めており、所属する学生諸君に安定した学習環境を提供できているとの評価の現れと考えております。

本年の日本西洋史学会大会は広島大学で開催されました。当講座の大学院生（博士課程）は一名が自由論題報告を行い、高い評価を得ました。日頃の研鑽の成果を学界に示す、よい機会となったことを喜んでおります。また、パリ第七大学に学部間交流協定によって留学した院生（修士課程）一名も無事帰国しました。フランス語運用能力の大幅な向上など、多くの成果を上げた充実した留学となりました。

また、過去数年間、山本文彦先生が研究科長として尽力されてきた文学研究科の大学院への改組転換が、八月下旬に文部科学省の承認を受け、正式決定となりました。他学部には改組を断念したところも出ており、講座の教員一同、次のステップに進めることを喜んでおります。今回は大学院カリキュラムの見直しに加えて、現在は歴史文化論講座に所属されている村田勝幸先生をお迎えすることとなります。来年四月に新規発足となる西洋史学研究室は、教員五名体制に強化されることとなりました。これまでも少なからぬ当講座の学生が講座の枠を越えて村田先生に教えを請うてまいりましたが、来年度からはアメリカ近現代史を志望する学生にとって、学びやすい環境を整えられると思います。

本年は博士学位論文を提出する年次に当たる大学院生はおりませ

んでしたが、修士論文・卒業論文には充実した内容のものが多くありました。

〈歴史文化論〉

二〇一八年度の歴史文化論講座は、教員四名、博士後期課程七名、修士課程七名、専門研究員・共同研究員ともに〇名、研究生三名、特別研究学生一名、学部生三二名の構成で、総勢五四名でのスタートとなりました。文学院（大学院）への改組を見据え、学部二年生の進級者が文化人類学研究志望者のみ（計三名）という状況下で、今年度が歴史文化論講座としてのラストイヤーとなりました。歴史系の教員も学生も、来年度からは日本史学研究室・東洋史学研究室・西洋史学研究室でそれぞれ新たな門出を迎えることになりました。講義のみならず演習においても、バラエティ溢れる受講者を目の前にしながら、歴史学の世界をそれ以外の方法論やテーマに関心をもつ学生たちに開示してきたこれまでの歩みを振り返ることが多い大変感慨深い一年であったと言えるでしょう。

「歴史学×文化人類学」という学際的スタンスから誕生した本講座において、「学際性」の追求は同時に「方法論の欠如」に対する警戒を不可避的に伴ってきました。ともすれば理論的枠組みを軽視しがちな学生に対して、理論的な境界を越えるためには先ず境界の存在を意識することが重要であると繰り返し説いてきたように思います。たとえば講座教員が展開する、日本・韓国、中東・イスラーム社会、アメリカなどを対象地域とした「歴史文化論（学部講義）」なども、受講生は学際的な科目として受講し、その学際性を体感しながら、他方で歴史学的な思考を意識的・無意識的に学ぶ場としてこれまで長らく了解してきました。

二〇一九年四月より、歴史文化論講座に所属していた教員と学生

は、日本史学研究室・東洋史学研究室・西洋史学研究室という新天地に移り、新たなスタートを切ります。新体制の下、移動する個々の教員および学生と再編により誕生する歴史学講座がこれまで以上に関連な学びと研究の場になることを記念しております。

なお、歴史文化論講座の最新の動向や教員・学生に関する情報につきましては、講座HP（<http://rekibun.webcrow.jp>）をご覧ください。

〈北方文化論〉

二〇一七年度の北方文化論講座（考古学、文化人類学、博物館学、民族言語学）の構成メンバーは、教員三名、博士後期課程八名、修士課程九名、学部生一四名の、計三四名です。

考古学分野では、夏季の野外実習として毎年恒例の豊浦町礼文華遺跡発掘調査（第七回）を実施しました（二〇一八年八月二四日～九月六日）。今年は、まだ詳しい情報がえられていなかった遺跡の北側への広がり把握するとともに、西側にのびる貝層の形成過程を明らかにできるなどの成果がありました。この間、例年どおり全学教育「フィールド体験型プログラム」の一環として北大の一年生二名を受け入れるとともに（八月二九日～八月三二日）、礼文華小学校児童の体験発掘（八月二八日）や現地説明会（九月一日）を実施しました。実習最終日に発生した胆振東部地震のため、学生の帰宅が遅れたり、引き続き同地で予定していた一年生用の一般教育演習を中止したりするなどの影響がありました。今年もお世話になりました。豊浦町教育委員会・豊浦町郷土研究会の方々に、あつく御礼申し上げます。教員の活動として、小杉教授は今年も学内の埋蔵文化財調査センターの運営のほか、北大歴史的資産活用TF委員、キウス周堤募調

査指導委員会（千歳市）、史跡垣ノ島遺跡保存整備検討委員会（函館市）、北海道文化財保護審議会（北海道）、史跡保存活用有識者懇談会（北海道）などで、史跡の整備・活用や文化財保護への協力に忙しい一年となりました。このほか、講演会（苫小牧縄文会）、放送大学の面接授業「北海道の人類史考古学」を通して社会貢献もを行いました。

高瀬准教授は、ロシア・サハ共和国の北極圏で野外調査を実施したのち、科研費（国際共同研究強化）による長期出張でロシア科学アカデミー極東支部東北学際研究所（マガダン）に一ヶ月、米国ワシントン大学人類学部（シアトル）に五ヶ月滞在し、研究を行いました。また、二〇一八年四月～七月までワシントン大学のベン・フィッツユー教授を日本学術振興会外国人招へい研究者として招へいし、将来の研究プロジェクトのために北海道で予備調査を実施しました。

今年の卒業・修了生は、学部生が三名、修士が一名でした。今後ますますの活躍を期待します。二〇一九年四月に予定されている文学院の発足にあわせて、北方文化論講座を基礎として「考古学研究室」と「博物館学研究室」が新設されます。北大の歴史のなかではじめてできる考古学研究室が、北大の歴史研究や北方研究により一層貢献できるように船出を準備しています。

北大史学会からのお願い

当会の財政状況改善と業務迅速化のために、大会・例会などの御案内を、ハガキからEメールに切り替えます。ご協力いただける方は、

件名

メールアドレス登録・お名前

（例）メールアドレス登録・北大太郎

本文

①お名前・ふりがな

（例）北大太郎・ほくだいたろう

②住所（郵便番号、番地は半角数字）

（例）〒060-0810 北海道札幌市4-5-2202

③電話番号（半角数字、ハイフン）

（例）011-706-xxxx

④専門分野

（例）中国古代史

を明記のうえ、左記アドレスまでEメールをお送り下さい。順次、Eメール連絡に切り替えて参ります。何卒ご理解とご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

hokudaihisgaku@gmail.com

